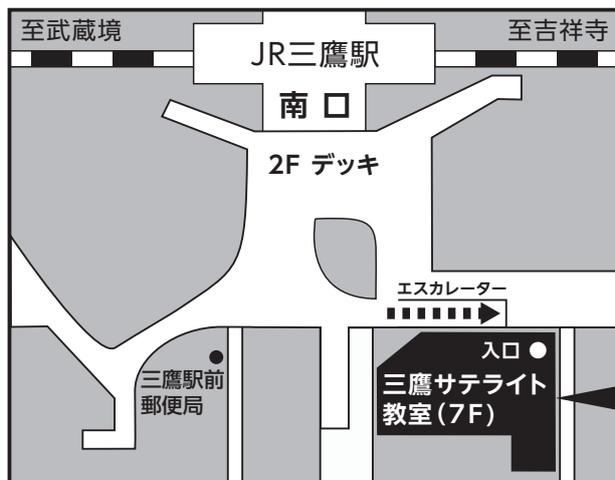


『源氏物語』橋姫（はしひめ）・ 椎本（しいがもと）巻を読む

受講料 (振込額)	12,500円				
必携テキスト	新潮日本古典集成 源氏物語 六 [石田穰二・清水好子(校注) / 1982年 / 定価：3,520円(税込)]				
講座概要	曜日	月曜日		日程	
	時間	15:00～16:30			
	回数	全5回	定員	40名	8月7・21日 9月4・11・25日
	開講場所	三鷹サテライト教室 7F / 大教室			
講師	東京大学名誉教授・紫式部学会会長・博士(文学) 藤原 克己(ふじわら かつみ)				
	東京大学大学院博士課程中退。岡山大学教養部講師、神戸大学文学部助教授、東京大学文学部教授、武蔵野大学文学部特任教授を歴任。博士(文学)。著書に『菅原道真と平安朝漢文学』（東京大学出版会）、『菅原道真 詩人の運命』（ウェッジ選書）、共著に『改訂新版 日本の古典——古代篇』（放送大学教育振興会）、『源氏物語 におう・よそおう・いのる』（ウェッジ選書）、『2008年パリ・シンポジウム 源氏物語の透明さと不透明さ』（青簡舎）、論文に「源氏物語とクレージュの奥方」（柴田元幸編『文字の都市』東京大学出版会）などがある。				
内容	宇治十帖の最初の二帖、橋姫と椎本の巻を読みます。主人公の薫は宇治の八の宮と親交を結びます。八の宮は北の方にも先立たれ、零落して宇治に隠棲し、二人の姫君を養育しながら仏道を修行していたのですが、姫君達の行く末を気遣いながら亡くなります。平安時代の浄土教では、息を引き取る間際に一心不乱に念仏に専念していること（臨終正念）が、極楽往生の絶対条件でした。この臨終正念を絶対視する考え方は、法然・親鸞によって乗り越えられてゆきますが、それに先立って『源氏物語』が、八の宮の姫君達への愛執の断ち難さと臨終正念の遂げ難さを凝視して描いていたということは、思想史的にみてもたいへん重要なことなのではないでしょうか。				
	① 8月7日：薫の生い立ちと道心 ② 8月21日：宇治の八の宮の境涯 —— 橋姫巻① ③ 9月4日：八の宮と二人の姫君 —— 橋姫巻② ④ 9月11日：姫君達の行く末を憂える八の宮 —— 椎本巻① ⑤ 9月25日：八の宮の死 —— 椎本巻②				



武蔵野大学 三鷹サテライト教室



〒181-0013
東京都三鷹市下連雀3丁目26-12
三鷹三菱ビル

JR中央線・総武線
東京メトロ東西線
JR 三鷹駅 南口より徒歩1分

三鷹三菱ビル 7F
(三菱UFJ銀行のビル)

1F入口からお入りください

- 「受講の手引き」を必ずお読みの上、ご参加ください。